

神奈川県にゆかりの深いチョウ類とその関連資料

猪又敏男（日本鱗翅学会理事）

神奈川県横浜は、江戸時代末期に諸外国に開放された港のひとつとしてよく知られています。開港にともない、イギリスをはじめ進んだ科学知識をもった外国人が往来することになりました。やがて彼らは居留区域に定着するものも増え、日本の自然物をさかんに本国に送りました。はじめは本国の博物館や好事家の依頼に応じたケースが多かったようですが、個人的に多くの資料を保持することもありました。このようにして諸外国へもたらされた日本の自然資料は、分野ごとの専門研究者によって次々に記録されていきました。

チョウ類の標本も彼らの収集や研究対象として重要な位置を占め、“横浜産”の多くの種類が記録されていくことになりました。これらの中には世界で初めて記録される種類もあり、後世の研究者にとっては該当の種の名称を確定するうえで欠くことのできない報告となっています。私たちはこのような最初の記録文を“〇〇種原記載”、記載に用いられた標本の採集地を“模式産地”または“基（準）産地”と呼んでいます。日本で最初に記録され、特定の名称（学名）が提示されたチョウは少なくありませんが、19世紀後半の開国直後では、横浜で採集された材料を基にした報告が抜きこんでいたのです。

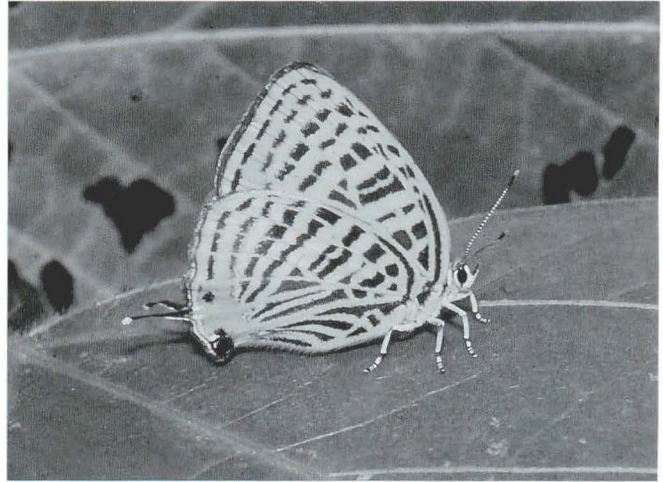
それでは横浜あるいは横浜付近を基産地とするチョウを年代ごとに調べてみましょう。

1862年 ヒカゲチョウ、コジャノメ

1863年 オオムラサキ

以上3種は、イギリス人のヒュウィツスン（W.C. Hewitson）によって記載されました。記載に使われた材料は1861年5～7月に来日した園芸家フォーチュン（R. Fortune）によって、横浜付近で採集されたものです。当時の横浜郊外はオオムラサキのすみ林があちこちにあったものと考えられます。

図1. クヌギ林に見られるウラナミアカシジミ。神奈川県内では減少が著しいチョウの1つ。



1865年 アカシジミ、ウラナミアカシジミ

これらもヒュウィツスンによって記載されています。先に述べたフォーチュンの採集品に基づくものと思われるが、確証はありません。現在では両種とも横浜付近で得られたものとして扱われています。

1873年 ウラゴマダラシジミ

イギリス人のマーレイ（R.P. Murray）によって発表されました。彼は当時横浜に在住していたプライヤー（H. Pryer）から標本を入手して、学名にその名を残しました。材料は横浜付近で採集されたものに相違ありません。

1875年 ミドリシジミ、オオミドリシジミ、ムラサキシジミ、コチャバナセセリ、オオチャバナセセリ、キマダラセセリ、アオバセセリ

以上7種もマーレイの記載したものです。いずれも小型で近似種をもつものもありますので、彼の識別眼はすぐれていたと言えます。上記の他にいくつかの種を記載していますが、残念ながら提出された名称（学名）は、より古い時代に発表された他の名称に先取りされて、現在は使われることがありません。

1875年 ゴイシシジミ、ゴマシジミ

これらの2種はイギリス人のドールズ（H. Druce）によって記載されました。記載文には“Yokohama”と標

本の得られた場所が明記されていますが、少なくともゴマシジミは横浜（付近）に棲息していた可能性はほとんどありません。これは関東地方の山地（例えば浅間山や富士山山麓など）で採集されたものが横浜に運ばれ、“横浜産”として国外に流出したためと思われます。日本の地理に不案内な外国人にとって、やむを得ない間違いと言えます。

1877年 オナガアゲハ

記載者はイギリス人のジャンソン（O.E. Janson）。横浜から少しはなれた相模大山で採集された標本を基にしています。この頃になると、外国人の行動範囲が拡大し、横浜からかなり遠方まで出向いて採集していることが分かります。

1878年 ツマグロキチョウ

この種もジャンソンによって記載されました。採集地は横浜と記されています。

以上、1862年から1878年の16年間に、神奈川県から世界に先駆けて発表されたチョウ類17種について簡単にまとめてみました。これらにたいして与えられた名称（学名）は、該当の種を示す唯一の国際名称として現在も受け継がれています。したがって、これらの17種は神奈川県にとって、もっともゆかりの深いチョウと言っても差し支えありません。また、上記のまとめは和

表1. 神奈川県から世界に先駆けて発表されたチョウ

和名	記載時の名称	現在の名称
オオムラサキ	<i>Diadema charonda</i>	<i>Sasakia charonda</i>
ヒカゲチョウ	<i>Debis sicelis</i>	<i>Lethe sicelis</i>
コジャノメ	<i>Mycalesis perdiccas</i>	<i>Mycalesis francisca perdiccas</i>
アカシジミ	<i>Dipsas lutea</i>	<i>Japonica lutea</i>
ウラナミアカシジミ	<i>Dipsas saepestriata</i>	<i>Japonica saepestriata</i>
ウラゴマダラシジミ	<i>Lycaena pryeri</i>	<i>Artopoetes pryeri</i>
ミドリシジミ	<i>Dipsas japonica</i>	<i>Neozephyrus japonicus</i>
オオミドリシジミ	<i>Dipsas orientalis</i>	<i>Favonius orientalis</i>
ムラサキシジミ	<i>Amblypodia japonica</i>	<i>Narathura japonica</i>
コチャバネセセリ	<i>Pamphila varia</i>	<i>Thoressa varia</i>
オオチャバネセセリ	<i>Pamphila pellucida</i>	<i>Polytremis pellucida</i>
キマダラセセリ	<i>Pamphila flava</i>	<i>Potanthus flavum</i>
アオバセセリ	<i>Ismene benjamini</i> var. <i>japonica</i>	<i>Choaspes benjaminii japonica</i>
ゴイシシジミ	<i>Miletus hamada</i>	<i>Taraka hamada</i>
ゴマシジミ	<i>Lycaena kazamoto</i>	<i>Maculinea teleius kazamoto</i>
オナガアゲハ	<i>Papilio macilentus</i>	<i>Papilio macilentus</i>
ツマグロキチョウ	<i>Terias betheseba</i>	<i>Eurema laeta betheseba</i>

名と年代のみで構成されていますので、肝心な学名そのものについては触れられていません。表に和名と学名の変化だけをまとめておきます。

横浜開港にともなう外国人による自然資料の蓄積とその解析は、そのまま神奈川県にゆかりの深いチョウを生み出す契機となりました。そして、このような時代背景とともに、横浜から日本最初の本格的なチョウ類図鑑が発行されることになります。このあたりの経緯に少し触れて、この小文を締め括りたいと思います。

イギリス人のプライヤー (H. Pryer) は1871年(明治4年)またはその翌年に来日し、横浜に落ち着きました。幼少の頃より博物学に興味をもっていた彼は、昆虫類を中心に各地の資料を集め、特に日本のチョウ類のすぐれたコレクションを作りました。彼はよほど日本が気に入ったのか、何と16年間も横浜に居住し、39才の若さで死去するまで日本各地を精力的に調査したのです。

このようにして集めた資料を基に、日本では例を見ない学術的な図説の刊行が企画されました。おそらくはプライヤーの日本生活が落ち着いた1875年以降のことだったと思われます。当時の諸外国で出版されたいくつかの図鑑

に匹敵するものを日本で作るには、多くの障害がありました。画家の発掘、印刷所や用紙の選定そして費用の調達などです。しかし、プライヤーの熱意はこれらの難題を乗り越えて、1887年に第一分冊の発行にこぎつけました。そして、1888年には第二分冊、1889年には第三分冊が相次いで発行され、ついに大作が完了しました。タイトル名は *Rhopalocera Nihonica* といいます。

この本はもちろん営利目的で出版された訳ではありません。現在では詳しいことは不明ですが、出版部数は200

部以内で、出版後に大半がイギリスに運ばれ、国内に残ったのは50部未満ということです。ですからこの本の原本を見る機会はほとんどありません。しかし、この秋に開かれる本館の特別展「チョウとガの世界」には、他の珍書とともに一般展示されることになっています。

本書の他にも神奈川県 of チョウに関連した資料は数多くあげられますが、日本最初のチョウ類図鑑が横浜から世にでたことを再確認しておきたいと思っています。

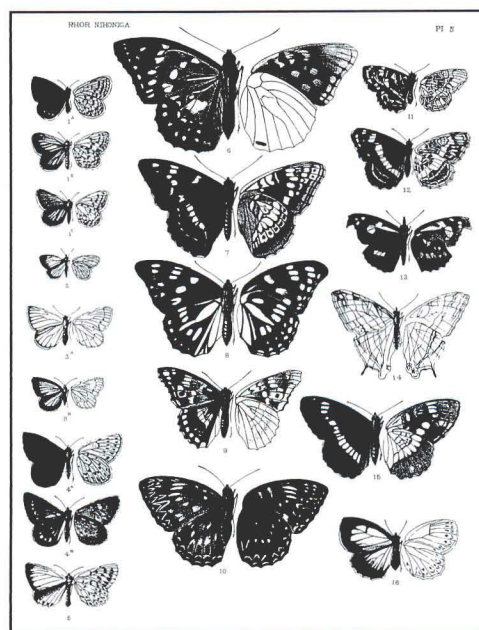


図2. プライヤーの *Rhopalocera Nihonica* の図版の一部。